

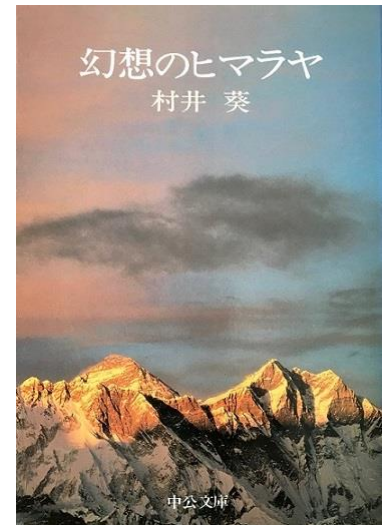
村井 葵著 『幻想のヒマラヤ』

海外登山を始めてから高山病にも苦しんだので、ヒマラヤか何処かで高山病で苦しんだ人の登高記を昔読んだ記憶があったことを思い出して、本棚の奥の方で茶色に変色していたこの本を読み直してみた。

舞台は、昭和40年の早稲田大学隊のローツェ・シャル（8383m）。この頃は未だ未踏峰であった。私事で恐縮であるが、昨年秋にイムジャ・ツェ峰に登った折、ローツェ・シャルはその直ぐ北側4kmの所に屹立する壮大な氷壁を持つジャイアントで、ヒマラヤ街道最奥の集落チュクンからイムジャ・ツェへの行き帰りに飽かず眺めたものであった（本HP『遙かな山』の「イムジャ・ツェ」の写真をご参照したい）。

早稲田隊大学隊は初めてのヒマラヤ遠征としてこの未踏峰に挑み、標高7000mの地点で雪崩にやられて隊員の一人が150m滑落、奇跡的に生命は取り止めたが、その救出活動は困難を極めた。この隊は結果的には登頂できなかったが、山岳界では登頂の偉業にも勝る救出作業と称えられたそうである。そのような遭難騒ぎの後再び登頂が試みられ、山頂まで200mを残して撤退した直後、この本の著者は昏睡に陥り、カトマンズ帰着後意識が回復するまで、1ヶ月間意識混濁と精神錯乱のまま死線を彷徨った。本書には困難な登攀の記録と併せて、回復後に書かれた死線彷徨の際の幻想（心理状態）や病状の記録、入山から昏睡までの身体状況の記録、また、このような状態になった原因の究明などが詳細に綴られており、高山医学が進歩した現在においても貴重な示唆を与えてくれると思う。

雪崩で遭難者を出した後、遭難者の引き降ろし・治療を優先して撤退するのか、それとも遭難者が多少落ち着いていれば、再度アタックを掛けるのかで大激論が交わされたことも記述されている。その頃の遠征は大学や国の名誉を掛けて出かけており、また、スポンサーから資金援助を受けていたということも考慮しなければならなかったのであろう、遭難者も死なしてはならない、できれば登頂も果たしたいという二律背反に苦しんだ隊員間の葛藤が書かれているが、登頂は果たせなかったにせよ、大怪我と重病という2人の隊員を生還させたのは、強い友情と結束に結ばれた隊員同士だったことに深い感動を感じる。 中公文庫 1980 年刊。



(2007 年 記)

[「山書の小溪」目次に戻る](#)